

## 道標

小川雅魚 千葉県

夏休み、東京から遊びに来た従兄弟が愚痴をこぼす。

「海の声が怖くて眠れなかった」

降るような星空を仰いで、「無気味だ」とも言う。

私の故郷伊良湖岬は柳田国男が渚に流れ着いた椰子の実から日本人のルーツは南方にあるのではないかと着想を得、その話を聞いた島崎藤村が詩に綴り、万葉集にも詠まれた風光明媚な土地。

潮騒を子守唄がわりに育った私にとって、海は母親の懐のような懐かしさと温かさに満ちていて、砂浜に寝そべて水平線の彼方に未来を想ったものだ。そして、星空はと言えば、夢を育む揺り籠だった。

折りしも『鉄腕アトム』のテレビ放映が開始された頃で、子供の私は画面に釘付けになり、帰宅（その頃私の村にテレビがあるのは医者の家だけだった）するとき、空から巨大ロボットが襲いかかってきそうな恐怖から小走りになったことを昨日のこのように覚えている。

宇宙には自分の知らない世界が無限に広がっている……、未知の世界の存在に対する畏怖と興味は幼な心にも依怙地で負けず嫌いの私を幾らか謙虚にしたような気がする。

「大人になればわかる」とか「世間とはそういうものではない」と、しょっちゅう親から窘められていた私は、ふてくされた感情を抱いてよく星を眺めた。

中学一年の夏休み前、手作りの天体望遠鏡キットが学校の斡旋で販売されることになった。零細農家の私には買ってもらえないどころか、言い出すことさえためられる額ではあったが、何としてもそれが欲しくなった私は条件を親に提示した。

「他のものは何もいらぬ。弁当のおかずもなしでいい。仕事の手伝いは一生懸命するから……」

すると、首を縦に振らない母に父が脇から「買ってやれ」と言った。「俺が煙草をしばらくやめれば何とかなる」

そのとき父が何を思ったのか、未だに私には分からない。

ともあれ、それからというもの私はその日の来るのが待ち遠しくてならなかった。

『屈折望遠鏡・口径〇〇mm・焦点距離〇〇mm・倍率〇〇倍・視野〇度・接眼レンズ……、対物レンズ……』

職員室前の廊下の棚に置かれた見本のパッケージを毎日眺めに行き、その箱に書かれた文字の意味、各パーツの働きを調べるために昼休みは図書室にこもり、家に帰れば夜が待ち遠しかった。

小さく輝く星も望遠鏡で見れば満月のように大きく見えるだろう、火星に生物の痕跡を発見出来たら僕は有名人になれる、新星を発見してみたいと夢は次から次へと広がって行った。

私の他にクラスで注文したのは六人、何日かは星の話題がヒソヒソ交わされることもあったが、いつの間にか私以外星の「ほ」の字も口にしなくなったある日、待ちに待ったその日がやってきた。

一学期の終業式の後、担任の先生が大きな箱を抱えて教室に入ってきた。一目でそれが何であるか、私には分かった。箱の長さが目に焼き付いていた鏡筒と同じくらいだったからだ。

通知票を一人一人手渡すと、先生は「望遠鏡キットを申し込んだ人は取りに来い」と言った。誰よりも先に椅子から飛び出した私は、顔を真っ赤にしていたに違いない。

「おい、おい、そんなに興奮するとレンズが割れちゃうぞ」

先生は手にしたキットの一つを一旦宙に持ち上げ、それから注意深く私に手渡した。

その年の夏休み、私は天体観測に明け暮れた。と言っても、天体の知識を増やそうとしたわけ

でも、何か発見しようとしたわけでもなく、ただ望遠鏡で夜空を覗くだけで充分満足だった。星の一つ一つが私にとっては見飽きぬ色彩と神秘を放ち、宇宙に地球と違う天体が存在するという事実が底知れない喜びであり感動であり、密かな恐怖でもあった。

天体について調べる代わりに私は、宮澤賢治の童話を読み耽った。『銀河鉄道の夜』、『鳥の北斗七星』、そして『夜よだかの星』

『ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行ってしまう』

そう嘆いて星になった夜だか。

その夜だかの星を探す私に東京の従兄弟が言う。

「カシオペア座の隣だよ」

けれど、カシオペア座の形すら知らない私だった。

「バカだな、そんなことも知らないのか」と、従兄弟はせせら笑い、天を指さした。

「あのWの字だよ」

そして、三脚すらついてない私の望遠鏡を「安物だな」とも笑った。

私はなぜか自分が従兄弟より数段劣った醜い夜だかのような気分になって、カシオペアの隣の小さな星がいとおしくてならなかった。

——それから幾星霜、私は今教壇に立って国語を教えている。

男四人兄弟の中で、文系に進んだのは私一人、次兄は光の研究を専攻し、レーザー光線などを

使った光学機器なども手がけていて、「月との距離などそいつを使えば正確に測定出来るんだ」と言う。そんな次兄の話に望遠鏡に心躍らせた子供時代を思い出すこともあるが、いつの間にか私の興味関心は星空から離れている。

高校時代は船に夢中になり、星を見なくなった望遠鏡を担いで丘の上に登り、沖行く船を眺める毎日、丸い枠の中、逆さに見える（望遠鏡で見るとそうなることを私は知らなかった）船に夢を馳せた。

全国の造船所、商船会社に手紙を出し、船舶の写真やパンフレットを送ってもらい宝物にし、現場で使う本物の設計図から貨物船の精緻な模型まで作り、これは東京の従兄弟を驚嘆させた。

ある商船会社宛ての手紙に「自分は船乗りになれなかったら死ぬつもりです」と無茶なことを書いたら、その会社の重役から懇切丁寧な手紙が届きびっくりしとこともある。

「船乗りになれなくても船に関連した仕事は幾らもあります。君が就職する頃もし私が今の地位にいたら私の会社を是非受けなさい」と、その手紙は結んであった。

将来は商船大学に進学したいという一途な思いは、けれど、視力の低下から叶わなくなり、造船工学の道もなかったわけではないが、如何せん、船そのものへの執着がすっかり失せてしまっていた。

熱しやすく冷め易いという癖が私にはある。星も船も生き方も――。

そんな私にとって子供の頃と同じ位置、同じ輝きで瞬く星たちは、いつも反省、自戒を促し、私が大きく迷い始めるときは道標のように方向を指し示す。

いつの間にか勤続三十五年、教師として定年を迎えようとしている。

来年三月、教壇を去るときのために私は生徒に向かってこんな別れの言葉を色紙に書いて準備している。

『喉が渴いたら 一杯の水 心がひもじいときは 一人の友 砂漠の道標は北斗七星 道に迷ったら一つの星を見つめなさい』